

Title	単称名辞の意味論におけるメレオロジーの役割に関する分析哲学的研究：指示の理論と四次元メレオロジーの関係について
Author(s)	小山, 虎
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/44835
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

氏名	小 山 虎 こ やま とら
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 18330 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	単称名辞の意味論におけるメレオロジーの役割に関する分析哲学的研究 — 指示の理論と四次元メレオロジーの関係について —
論文審査委員	(主査) 教授 中山 康雄 (副査) 教授 奥 雅博 教授 菅野 盾樹

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、固有名や代名詞、確定記述といった単称名辞 (singular term) の意味論について、特にメレオロジー (部分と全体に関する形式的理論) を用いる立場に対しての綿密な検討が行われる。具体的には、単称名辞に関する様々な意味論的問題を詳しく検討することによって従来の理論の不十分な点を明らかにし、可能な範囲で新たな解決案を提示することが目指されている。また、それと同時に、これらの問題を詳しく検討することで、必要となる存在論的基盤について一定の展望を得ることが目指されている。よって本稿の目的は二つあると言える。ひとつは、様々な意味論的問題を解決するためにはどのような存在論的基盤が必要となるのかを明確にすることである (これは第二章から第四章で行われる)。そしてもうひとつは、その存在論的基盤、すなわち、四次元メレオロジーの妥当性を検討することである (これは第五章と第六章で行われる)。

まず第一章では準備として、四次元メレオロジーの基本原則が提示される。本稿で扱われる「メレオロジー」とは、論理学における標準的体系である一階の述語論理 (first order predicate logic) を、半順序関係が成り立つような「部分-全体関係」、および補足性 (supplementation) に関する公理によって拡張した公理系である。そして、このような「部分-全体関係」が時間軸においても成り立つことを認めるのが本稿における四次元メレオロジーである。

第二章では、これまでの研究で見過ごされていた問題点を指摘するために、直接指示の理論 (the theory of direct reference) と指標詞 (indexical) との関係が考察される。直接指示の理論は単称名辞の指示についての非常に有力な理論であり、その背景には G・フレーゲ以来の単称名辞の概念とそれに対する批判がある。本章では、直接指示の理論を歴史的に概観し、背後にある直観を定式化することを試みる。その上で、この直観を裏付ける D・カプランの議論を批判的に検討する。その結果、直接指示の理論には問題点があることが指摘される。すなわち、複数形の取り扱い方である。

第三章では、前方照応する代名詞 (anaphora) での指示概念の役割を批判的に検討する。G・エヴァンズは照応表現の分析に指示概念を持ち込んだ。エヴァンズのアプローチは現在でも有力なものと考えられているが、その一方で、第二章で批判された指標詞の問題点と類似した点も多くある。本章では、エヴァンズの分析を批判的に検討することによってその問題点を明らかにする。同時に、メレオロジカルな存在論を前提するアプローチの有効性を示すことによってエヴァンズの方法が不要である、つまり照応表現の分析に指示概念が不要であることが示される。この結果は、メレオロジカルな存在論が意味論において重要な役割を果たしうることを示唆している。

第四章では、S・クリプキが考案したいわゆる「信念文のパズル」と単文における類似例が考察の対象となる。「信念文のパズル」とは、信念文（英文の場合「I believe that …」）の中に固有名が含まれており、そしてその固有名と同じ指示対象を持つ別の固有名が存在する場合、問題の文に含まれる固有名の意味論的機能について首尾一貫した説明を与えることが困難になることを示す問題である。これに対しては、直接指示の理論と関連する二つの異なる立場の間で論争が行われている。

ところが、単文においても信念文の場合と同様のパズルが構成できることが近年 J・ソールによって示された。従来の理論は信念の持つ特徴に多くを依存しているため、単文の事例と信念文の事例とは酷似しているにも関わらず、両者を同様に扱うことはできない。本章では、従来の理論を比較・検討した上で、新たな視点として、四次元メレオロジーを前提とする理論が提案される。

以上の第二章から第四章では、様々な単称名辞に関する意味論的問題を解決するために四次元メレオロジーが重要な役割を果たすことが示唆されている。したがって、これまでの議論が成功しているなら、単称名辞の意味論において四次元メレオロジーが重要な役割を果たしうることが示されたと言えるだろう。

しかし、四次元メレオロジー自体にも問題点があり、それに対する考察なしには四次元メレオロジーの重要性を確立したことはない。特に、四次元メレオロジーに対しては、その存在論的含意について形而上学的観点から多くの問題点が指摘されている。そこで第五章からは四次元メレオロジーに対する形而上学的問題に話題が移る。

第五章では、D・ルイスが四次元メレオロジーを主張するために論じた時間的内在的性質（temporary intrinsics）の問題に焦点を当てる。ルイスの議論には多くの反論があるため、一般にはルイスの立場は説得的なもののみなされていない。本章では、非ルイス的な四次元メレオロジーの可能性を探ることによって四次元メレオロジーがなお有力な選択肢であることが論じられる。この結果、四次元メレオロジーに対する重要な批判のひとつが適切でないことが示される。

第六章では、一般的には四次元メレオロジーと相容れない立場であると考えられている時間の現在主義（presentism）が検討される。第五章でも現在主義と四次元メレオロジーが相反するものでないことが論じられているが、現在主義そのものに対する決定的な批判は行われていない。本章では、特に様相と時間をパラレルなものと考えることによって現在主義を擁護する立場を批判的に検討する。その結果、維持可能な現在主義がどのような形態をとるのかは、四次元的な理論との関係において明らかになることが示唆される。

以上により、四次元メレオロジーに対する主要な批判とされている議論は反駁される。したがって、四次元メレオロジーを用いた理論は、単称名辞の意味論について生じる様々な問題を解決する上で有効であるだけでなく、主要な批判に耐えうることも示された。同時に、意味論的問題を考察する際、存在論的基盤も考慮することの重要性も示されたと言える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、単称名辞の意味論と呼ばれる分析哲学の古典的領域の諸問題を四次元メレオロジーという存在論を基盤に議論したものである。「メレオロジー」とは、部分・全体関係を基礎とした形式的存在論のことである。本論文で扱われている問題は、言語哲学、言語学的意味論、形而上学的存在論、哲学的時間論などの諸領域にまたがるものであり、論理学、言語学、分析哲学などに関する深い理解が要求される。本論文は、六章から構成されるが、言語哲学・言語学的意味論と関わる前半部と形而上学的存在論・哲学的時間論に関わる後半部に分けることができる。前半部では個別の問題に対しメレオロジーを含んだ形式的理論を用いて解決法を具体的に提案し、後半部ではこの方法論の哲学的基盤を明らかにするというように、全論文は適切に、しかも、統一的に構成されている。そして、全体にわたり、1990年頃から現在に至る最新の英語文献を引用しながら何が問題となっているかを明確化し、それらの問題に対する独自の解決法を提案するというスタイルをとっている。本論文は、「単称名辞の意味論」という古典的分析哲学の問題に四次元メレオロジーという新しい立場からいどんだ意欲的なものである。また、終始、厳密な議論が展開され、独自の提案に満ちている。この意味で、本論文は、言語哲学と形而上学的存在論を厳密な議論により結び付けるといふ新しい方向性を日本の分析哲学研究に指し示すものであると言ってよい。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定した。